

橋本の改革によって、戦時に必要とされる衛生要員の看護卒を召集し、欠員が生じたときは確実に補充できるシステムが確立され、1890（明治

23）年までに戦時編制表が製作され、衛生部の戦時編制が樹立された。

（平成29年12月六史学会合同例会）

自筆資料からみる曲直瀬道三の医学と医療

町 泉寿郎

筆者は、2017年6月10～11日に京都大学で開催された第118回本学会学術大会において第29回矢数医史学賞を受賞する榮譽に浴した。筆者がその代表著者として受賞した受賞対象の書籍は、論文集『曲直瀬道三と近世日本医療社会』（武田科学振興財団杏雨書屋、2015年）であり、計15人の著者による28本の論文等から構成される。道三・玄朔に関する文献資料、および従来の研究蓄積は膨大な量にのぼるが、杏雨書屋には藤波剛一旧蔵にかかる今大路家文書をはじめとして、研究の基盤となる最重要資料が多く収蔵されている。そこで、本書では論文だけでなく、杏雨書屋所蔵の曲直瀬家資料の目録や曲直瀬道三の落款・印章など、資料編の充実に努めた。

そして筆者自身の論考としては、総論として①「曲直瀬流医学の伝承——その成立・展開・再評価——」と、資料として②「曲直瀬家肖像」（共著）、各論としては『啓廸集』の古写本の訓点・訓法を問題にした③「策彦周良「題辞」・曲直瀬道三「自序」」、④「曲直瀬道三と『黄素妙論』」、⑤「曲直瀬養安院家と朝鮮本医書」、⑥「曲直瀬道三の臨床と診断に関する覚書一附。甘静軒問・道三答『師弟問答』翻刻」の6編を執筆した。

今回の例会報告では、まず道三の医療の実例をよく示す資料として、⑥において取り上げた『師弟問答』を紹介し、「察証弁治」と言われる道三の診断・治療がどのように行われていたのかを見てみよう。

『師弟問答』（請求記号・新杏1607）は、道三の門人である甘静軒と道三の間で交わされた往復書簡を卷子仕立てにしたものであり、もと六巻あったもののうちの第四巻に相当する。第四巻は、半

紙26枚を1巻に装丁しており、その内訳としては、宛先が明記されているものは計7通にとどまり、道三から甘静軒に宛てた書簡4通、甘静軒から道三に宛てた書簡3通であるが、その他も内容から見て甘静軒と道三の間で取り交わされた書簡と考えて差し支えない。

書かれた年代は、第三紙の甘静軒書簡「永元戊午七月十九日（＝永禄元年1558）」、第16紙に「永禄四辛酉歳（1561）三月廿八日出来申候」とあることから、道三50歳代の永禄のはじめ頃と推定される。

甘静軒という人物について得られる情報はあまり多くないが、第15紙（甘静軒宛道三書簡）に「平野東坊 甘静軒」となることから、大坂の平野熊野権現の東坊にいた人物であると考えられる。

この『師弟問答』に関連の深い資料に、京都大学富士川文庫所蔵の『翠竹翁問答』がある。『翠竹翁問答』は末題に「甘静老問答書」とあり、また『師弟問答』第23紙と『翠竹翁問答』第17丁裏、『師弟問答』第25紙と『翠竹翁問答』第10丁裏～11丁表など、その内容が文言まで一致する部分が見いだせることから、卷子本『師弟問答』は後に『翠竹翁問答』として編集されるものの原本であることがわかる。他方からいえば、従来その成立過程が明らかでなかった『翠竹翁問答』は、道三と甘静軒との師弟間に交わされた往復書簡を編集したものであることが確認でき、道三の実際の診断を伝える資料として十分な信憑性を持つ資料であると言える。『翠竹翁問答』には、出来合いの処方を使用するのではなく、証ごとに適応する薬方を考えて処方を決定することが「当流医学」の真骨頂であるとする、道三の次のような言

葉が見える。

薬方アマタ注進可仕候。如此御病証々々ニ療薬
逐一ニ注進候叟、当流ノ奥儀不過之候。余ノ常
ノ公界ノ名方ハ当流ニ不用候。其病々々ニ相隨
事專一ニ候。

この言葉通りに、『師弟問答』では書簡によつて甘静軒が報じた患者のさまざまな病証に対してそれを治療する生薬が余白に書き入れられ、いくつかの病証とそれに対応する生薬を列挙した結果として、適切な処方導き出されている。診断にいたるこうした筆の運びは、後に編集された『翠竹翁問答』では十分に窺いえない、自筆往復書簡によって初めて感じ取ることができる機微である。

なお、『翠竹翁問答』にはしばしば淫事に関する質問事項があり、発問した三好長慶・義興父子、瓦林備中守、松永久秀をはじめとする戦国武将たちにとって、これが重大な関心事であったことを窺わせる。道三は房中養生に関して基本的に腎薬使用を戒めているが、緑鶯膏、狗骨灰・海螵蛸など、『黄素妙論』（本書は道三から松永久秀に提供された奥書を持つテキストもあるが、従来その特異な内容から道三著作としての真偽は確定していない）収録の薬方と同一の記述があることから、時に患者からの要求に応じて、催淫や強壯の処方を与えることもあったことが分かる。一見特異に思われる性養生書『黄素妙論』の薬方は、戦国武将等の需めに応じ、実用に供されたものであったことがわかる。

次に、道三の学知の特色を物語る自筆資料として、主著『啓迪集』に附された、策彦周良「題辞」、および道三「自序」を取り上げよう。『啓迪集』には道三生存中に遡る古写本が複数存在しているが、その中でも広島県三原市立図書館所蔵写本は「題辞」「自序」部分や各巻首の書題が道三自筆にかかり、特に「題辞」部分は詳細な訓点が書き入れられている点で重要である。策彦自筆の

「題辞」を持つ別本も存在するが、策彦自筆本は草書体の白文であり、訓点は一切施されていない。刊本『啓迪集』にもある程度の訓点は反映されているが、写本に盛り込める訓点の情報量（左右傍訓・濁点・音号譜・訓号譜など）には到底及ばない。

道三によって書入れられた訓点に忠実に訓読すると、その漢字の字音・字訓および添え仮名は現行の漢文訓読と比較してかなり特異なものである。なお今後の検討に俟つ部分は残るが、こうした特異な訓法は、二度にわたる渡明経験をもち一流の五山学僧として知られた策彦周良による漢文の訓読を、道三が忠実に記録しようとした結果であろうと考えている。五山文化末期の漢文の読み方を検討する材料として、道三自筆本は価値がある。

また、「題辞」と「自序」に関しては、その部分だけを取り出して講義が行われていた。杏雨書屋所蔵写本にも、本文の余白や上下欄外に「講義」が書入れの形で残されている資料があり、更に「講義」だけを抜き出した「抄物」も残されている（台湾・故宫博物院所蔵本）。これら古写本は、道三の学問を追及する上で、同時代の五山学僧や足利学校との影響関係の検討が必要であることを示唆する。

なお蛇足ながら、従来、作者未詳の国立公文書館所蔵写本『運氣私抄』（特112-5、江戸医学館旧蔵）も、管見では道三の自筆と考える。本書と内容的に一致点の多い京都大学富士川文庫所蔵写本『（称意法印謹之先生）運氣私図』は、1711年撰の吉田宗怡序によればその先祖吉田宗桂の著という。しかし、別に残る吉田宗桂『運氣一言集』とは異質であり、これを吉田家の「運氣学」として位置づけることには躊躇を覚える。かつ『運氣私図』には道三の養嗣玄朔が記した図表もあり、恐らくは道三撰と考えるべきではないだろうか。

（平成29年12月六史学会合同例会）。